

Über den Begriff Dō aufgezeigt in einer Studie zum Budō von Heiko Bittmann

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20419

ハイコ・ビットマンの武道論に見られる道概念について

大久保英哲・Heiko Bittmann*・久光文彦**

Über den Begriff Dō aufgezeigt in einer

Studie zum Budō von Heiko Bittmann

Hideaki OKUBO ; Heiko BITTMANN und Fumihiko HISAMITSU

Zusammenfassung

Dieses Manuskript ist die Übersetzung des Aufsatzes "Betrachtung des Begriffs Dō in den traditionellen japanischen Kampfkünsten"(1989) von Heiko Bittmann, ergänzt durch die Untersuchung einiger daraus aufgezeigter charakteristischer Besonderheiten. Diese sind hinsichtlich des Begriffs Dō in den nachfolgend aufgeführten fünf Punkte dargelegt.

1. Grundlegendes Verständnis des Begriffs Dō
2. Historisches Verständnis von Dō
3. Dō und sein Einfluß auf die Übungsformen
4. Die Bedeutung von Dō und der sportliche Wettkampf
5. Sprachwissenschaftliche Untersuchung zur Bedeutung von Budō

Heiko Bittmann befaßt sich in seiner Studie zum Begriff Dō zunächst mit sprachwissenschaftlichen, geistesgeschichtlichen und religiösen Aspekten. Daran anschließend untersucht er welchen Einfluß die Geistesgeschichte auf die Etikette und das Üben im Budō ausübte bzw. geht der Befürchtung nach, daß die Budō-Künste sich in sportlichen Wettkampf verwandeln. Das Ergebnis dieser Studie beinhaltet als Ideal die Einheit von Körper, Geist und Technik. Wenn auch nur eine dieser drei Komponenten vernachlässigt wird, ist auf dem "Weg" (Dō) die "Reife" nicht zu erlangen.

緒 言

現在武道は国内ばかりでなく、国外でも広く行なわれるようになってきていることは周知の通りである^{※1}。しかしながら国外では武道がゲームのスポーツ競技と捉えられ、技術的側面や体力的側面に重点が置かれており、武道理論的研究は必ずしも盛んではないように思われる。

こうした中でTübingen大学の日本学研究者(Japanologist), Heiko Bittmannは、思想的観

点から武道を研究しているドイツでは数少ない武道研究者の一人である。本稿では彼の論文 "Betrachtung des Begriffs Dō in den traditionellen japanischen Kampfkünsten" (1989)を取り上げ訳出し、その中のいくつかの特色について若干の考察を加える。

なお、この訳出はHeiko Bittmannの1990-1991年金沢大学留学中の大学院教育学研究科「体育・スポーツ史特論演習」において、本人自身の参加のもとに訳出されたものである。訳出に当たっては出来る限り原文を尊重したが、意識した箇所もあることを付け加えておく。

平成4年9月16日受理

* Tübingen 大学

** 金沢大学大学院

I ハイコ・ビットマン「伝統的な日本の格闘技における道概念の考察」

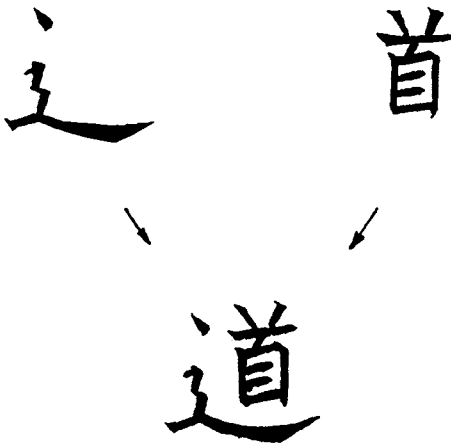
1. 一般的な道概念

道（訓読みで“みち”，音読みで“どう”，中国読みで“タオ”）の概念は，文字通りには「道」あるいは「小道」と翻訳されるが，転じて道は原理・絶対的なもの・法則などを意味し，いくつかの翻訳の可能性を示す。文字自体は，「進むこと」（部首¹⁾162）と「頭」あるいは「指導者」（部首185）から合成されており，およそ「先に立って歩く指導者」と考えることができる。（図1参照）

図1：道の文字

部首 162

部首 185



いくつかの単語，例えば空手道（素手の道）・茶道（茶の道）・書道（書の道）等たびたび日本語に見られる合成語から，この道概念は単なる道の意味だけでなく，もっと深い意味を持っているということが理解できるのである。

2. 日本文化における道の歴史的展開

道は中国にその起源をもっていた。道教²⁾の

祖である老子³⁾は，次に述べる古典記の「道教」⁴⁾においてタオ（＝道）を教え説いている。：

道の道とすべきは常の道に非ず，名の名とすべきは常の名にあらず，無は天地の始に名づけ，有は万物の母に名づく，（故に，常無以て其の妙を觀と欲し，常無以て其の微を觀んと欲す，）此の両者同じく出でて名を異にす，同じく之を玄と謂ふ，玄の又玄，衆妙の門。⁵⁾

タオとは，ここでは全ての存在するものの起源を示し，道とは，一切の事物を動かすことを意味する。全ての道に人間の一つの道は適合する。そして，より大きな調和の状態において双方の道は相対しなければならない。人間自らの行為や思想と，自分よりも上にある世界の道とが逸れてしまった時，人間にコンフリクトが生じるのである。

日本最古の歴史書である古事記（西暦712年）と日本書紀（西暦720年）には，日本における道概念が示されている。おそらく人々は，それ以前に道概念を周知していたであろう。というのは，日本は7世紀の初めには中国と関係を持っており，そのために中国のタオ概念の意識は日本の中に反映されていた時期があったからである。初期の道というものは，単に手作業の習熟や精神的な習熟を意味していたに過ぎなかった。奈良時代（西暦710～784年）末に道教・仏教・儒教そして陰陽の教え⁶⁾に影響を受け，倫理学に基づく道理解の中で人間を宇宙と関連づけ，宇宙の産物として作られたものとして理解するようになった。平安時代（西暦794～1185年）になって道に関する多くの技術と研究が進められ，道の考え方は日本文化の確固たる構成要素の一つに発展した。次の鎌倉時代に道は，それまで以上に精神の強化と完璧さを強化した。とりわけ鎌倉時代に強く影響を与えた禅仏教⁷⁾は，道の精神的な本質にも影響を与えた。これら精神的な本質は，それまでの技術や知識を伝えることと並んで，主に一般的な心理と教えというものをそれに付け加えた。そして道は幅

広い国民階層に受け入れやすくなり、もはや狭義の技や専門家の占有物ではなくなった。鎌倉時代において禅は、全ての日本文化に大きな影響を与え、道を形作る要素に決定的な役割を与えている。それは次の時代になっても変わることはなかった。多くの精神的側面を持つ道徳の教えの中でも、例えば禅は道という言葉を用いることで美的理想の基礎を作った。このことによって⁸⁾“侍の道”(武士道)が成立し、将軍⁹⁾達にさえも禅に由来した“道”といういくつかの技芸が浸透していった。その時代からこのかた道は人間形成の手段として、人間としての完成に導く手助けをするものとして位置づけられてきた。その際の最も基本的な考え方は自己練習である。道とは相手と競争して練習するよりも、自分のために練習すべきものである。日本において生じた道は精神や練習ばかりでなく、日々の生活の中にさえも根底を作っている。中国において道は確かに哲学的・理論的形成を与えることは可能であったが、己れのための実践的な“道”を与えることは不可能であった。まさしく結果として生じた実践面は、日本人がこの“道”に生きて歩いていくことを可能にした。西欧化や工業化などの様々な影響にもかかわらず、道は師から弟子に世代から世代によって伝えられ、何世紀もの時を越えてさらに拡大した伝統を今日までに刻み込んでいる。

3. 伝統的な日本の格闘技に関する「道」の意味

(1) 熟達に至る道としての「道」

例えば、柔道(柔の道)・剣道(剣の道)・空手道(素手の道)・弓道(弓の道)・合気道(神の調和の道)・薙刀(鉾槍の道)等の伝統的な日本の格闘技の練習に参加することの意義は結果にあるのではない。真の意義は自分で目標を定め、その目標に到達することにある。これが“道”，すなわち道本来の意義なのである。日本の格言によれば次のように説かれている。：

究極の目標は勝つことでも負けることでも

なく、完璧な人格形成である。技術の熟知や習熟の役割は副次的なものであり、最終目標として理解されるものではない。練習をすることの意義は人間性を高めることであり、自己と宇宙を調和させた生活が可能になるようにすることである。

これに対し西欧のスポーツ理解においては技術とすぐれた技能こそ最も重要である。そのため能力向上の目安となる秒やセンチメートル、または得点などの結果でどの程度達成したかを知り、これらが最善の状態を良とする。すなわち練習の意義は好成绩の達成を得ることである。

従って西洋の考えにおいてのトレーニングは弓術家達の例をとるならば、相手がポイントをとったらそれ以上のポイントを取ろうとすることである。日本の弓道(弓の道)はそれとは異なり、的に命中させることや試合に勝つことのための練習ではない。むしろ自己認識の教育的・心理学的な要素のために練習を行なっている。このことは日本の格闘技の全てにおいて言うことができる。この体系的思考の中心となる枠組は禅仏教の影響を受けている。よってあらゆる精神の修練と同時に絶えず身体の修練を行ない、また反対にあらゆる身体修練と同時に絶えず精神の修練も行なうのである。すなわち精神と身体・知識と行為・理論と実践は相対立するものではなく、相互に補完し合っている¹⁰⁾のである。禅の根底にある考え方は、根気強い実践と練習によってのみ道の真の意味の理解に到達することができるということである。身体(肉体)・精神そして技術はその点において一体になっていなければならない。すなわちもし弓道家(弓人)が矢を的に当てそこなった場合、その瞬間にその人は身体及び精神の修練が完璧ではなく、“道”に至ることができていないということを示しているのである。まぐれ当たりであった場合にも全く同じことが言えるのである。実践を抜きにした理論だけでは技術を身につけることは不可能であり、また逆に身体修練だけでも同様である。それは武道ではない道

（例えば茶道）にも言えるのである。精神的技術だけの、あるいは身体的技術だけの完全性を求めること、すなわちこの宇宙と調和して生きていく中で自分自身を認識することは、“道”すなわち成熟の目標と成り得ないことはないが、いずれにせよどちらの場合でも実現はしない。何故なら、例えば純粋な身体的技術の練習構成要素を持った格闘技は時として優れた競技者を育てるが、日本の考え方ではそれはおそらく人間本来のあり方、あるいは人間性の向上にはならないからである。

もちろん試合を通じての徳は公正である。西欧のスポーツにおいても公正さは、人間の本来の在り方としての社会的な行動に到達することを求めている。:

…スポーツ賭事への規制が増加している。…公正さは、争い・殴り合い・殺人・殺害などに生じる曖昧な競争の結果を認めないことと同様に、賭事をする観客にさえ明確に認識できる諸条件を作りだすことに必要不可欠である。すなわち、賭事に起こる争いなどに際し、小さい子供にまで規制をし、明確な禁令を与えると共に賭事を行なう場所を限定する。…¹¹⁾

国際的なスポーツ発展の中で日本のスポーツにも、そして格闘技のスポーツ試合の中にもそのような事実を見いだすことができる。それは道の“成熟”の考えの理念に関わる問題であり、無視できないものである。日本でも、世界でも必然性あるいは時代精神によって影響を与えることは止むを得ないことかもしれないが、精神史の伝統である道と現実の毎日の生活の間に離反が生じているのである。道に含まれる禅仏教の物の見方にも、とりわけ人間の自己主張の問題は重視されている。例えば勝ち願望・容姿・名声・利己主義などは“成熟”への到達として人間的存在の完璧さとは対立するものなのである。従って、最高の完璧さに到達するために無を手に入れなければならない。すなわち本能的でなおかつ正確であることと、直観的でなおかつ

つ注意深い行動をとるために自己主義を克服し、そして自己主義から解放されなければならない。この考え方はとりわけ昔の格闘技においては決定的な役割を果たしていた。今日のスポーツ種目は何かしらの得点を獲得することが最も重視され、身体能力と技を磨くことに大部分の練習が費やされるが、それは決して生や死のためではない。昔の格闘技において必殺の一撃は死を意味したのである。:

一瞬間の間に全ては行なわれる。この瞬間に全てを決定するのは精神であり、技術と身体はその後位にある。現在全てのスポーツを行なう時には考える時間がある。しかし格闘技の中にはそれはない。どれほど短い時間であっても考えたならばそこに隙が生じ、相手にそこから利を引き出され負けてしまう。精神は行動及び反応に備え、中断されることのない状況により精神集中しなければならない。そのため精神は優先的の意味を持っている。¹²⁾

身体と精神と技術は密接に並んでいる。しかし先に精神、あるいは直観こそがそれに応じた技術と体の動きを導く。ここで禅と格闘技の達人であるデシマル・ロウシ・タイセン (Deshimaru-Roshi, Taisen) の言葉をもう一度繰り返しておこう。:

もし戦いの中で強い技術と強い身体が出会えば技術が勝つだろう。もし強い精神が強い技術に出会えば勝つのは精神であるだろう。つまり精神は相手の隙を見つけだす能力がある。¹³⁾

どのような技術を選択することがふさわしいかということ判断するという意味において、精神あるいは直観は考えるべきことではないのである。もし考えるとすれば上記に述べたような行動の隙が生じてくるだろう。それと共に直観的注意深さの中で行動することには、正確な技術を発現できるという前提条件を伴う。これは全く我を忘れた状態と無意識の状態で起こらなければならない。それに伴ってヘリゲルが

自分の書の中¹⁴⁾で記述している様に、例えば弓道家の射撃も“熟した果物”が落ちると同様に自然でなければならない。このことを達成するために、例えば格闘技の中にあっては最終目標を試合に勝つこととしてはいけない。それは不変的そして断続的な実践練習によって、もしかすれば生涯を通して“熟達”へ至る“道”の行動をとらなければならないのである。

(2) 「道」と作法形式及び練習形式

ただ実践的な練習によってのみ内面的な落ち着きを得ることができ、誤動作や無駄な動作をすることがなくなる。これによって技術先行の技は克服され、道の“成熟”という状態に近づくことができるであろう。しかし西洋感覚でのトレーニング（成績を得点の量などで定める）にはこれらは見られない。また思考や知的な思弁あるいは抽象的概念にも見られないのである。

以上の様な理由で日本の格闘技は作法形式及び練習形式を一連のものとしており、西洋のスポーツや西洋格闘技、例えばボクシングにはこの様なことを見いだすことはできない。

そこには儀式的習慣と強度に形式化された礼儀作法があり、それを遵守することは自分と相手の存在に対するある種の形を作る。それらは人間の道徳的な教育のための手助けになっている。一例として共同練習のために選んだ相手に対する挨拶としての立礼が挙げられよう。同様に厳しい階級的秩序の制度は、例えば思いを鎮めて座ること（黙想）が済んでから黒帯（有段者）が立つ前に白帯（非有段者）が立つことを許さない。このことは西洋のスポーツの中には見出すことはできない。しかしこれは決して処罰を示すものではなく、まだ初心者である者の純粋な尊敬の念の現われである。他には打擲して教えるという例が挙げられる。日本では言葉で教えるということあまりしない。先生は生徒の技術的に弱いところを身につくまで打擲する。つまり矯正のために苦痛を与えることによって覚えさせるのである。この打擲は激励（生

徒の技術向上）のためにするのであって、人を傷つけるためにするのではない。全ての伝統的な日本の格闘技にはこの行動形態がある。

それに加えて彼らは、（外部者から見れば心のこもっていないつまらない機械的な練習に見えるのだが）常に同じことを繰り返す技術の“基本”に専念する。しかしこのことは十分な精神集中の中で、注意深く身体・精神・技術をより密接に結びつける。このことは、個々の構成要素が完全に入り交じり、まとまりを形成するのに重要な役目を持つのである。^(カタ)形は練習者が想像上の相手に対して一連の技術を実行することである。また現実の中で不安や脅威において常に警戒心や平常心を保つために、身体・精神・技術からの完全な熟達を現わすべき状態である内面的安定を実際の動きと並んで学ぶものである。その他の練習形式では乱取りがあげられる。これは既に周知している技術を一連の動きの中で行なうものであり、身体・精神そして技術を均しく成熟へ至らせる効果がある。これらの練習形式は特別な練習（例として柔道の受け身＝落下の練習、空手道の組み手＝様々な種類の格闘練習など）と並んでおよそ全ての伝統的な日本格闘技の中に見ることができる。例外として手で届く距離の中に“相手”を持たない格闘技の弓道が考えられるが、弓道においてそれに匹敵するものは射法八節である。これは他の武道でいうところの“基本”であり、弓矢の操作技法を八つに分けたものである。この動きはいつも繰り返されるもので、道の感覚において常に“成熟”の獲得を学ぶことに関連があり、他の全ての練習にも同様に言えるのである。

これ以外にも道と格闘技には、呼吸練習と瞑想練習が重要と考えられている。禅－仏教や道教にも呼吸とは単に空気を吸いこむだけでなく、呼吸を行なうことで身体に宇宙の全エネルギーを総括したものの一部を取り入れるという見解が含まれている。というのは、全宇宙は宇宙エネルギー（日本語 気、中国語 チィ）から成り立っており、人は呼吸によって宇宙の根

本要素を摂取して身体的・精神的な生命現象にこれを利用し、そして吐き出すのである。呼吸することについては伝統的な日本の格闘技においても、そして禅—瞑想の原理的なものにおいても“腹部”，詳しく言えば横隔膜で行なうとされている。というのは、これらに基づけばそれは体の中心に位置し、呼吸をする際にもっとも重要な役割をするのである。今日大抵の人々には“胸式呼吸”が一般的である。そのためにこの“腹式呼吸”を獲得するためには、多くの練習をしなければならない。¹⁵⁾

禅の瞑想的な構成要素とは格闘技の中で例えるなら黙想であり、これは練習者にとって“成熟”への“道”のための支援をすると考えられる。

(3) 「道」とスポーツ競技

西洋のスポーツ理解である“成績”に基づくスポーツ競技は、センセーション・記録・好成績・競争相手・お金などの概念と固く結びついている。スポーツにおいてタイムを計測したり、順位を付けたりするこれらの現象が伴わなくては、広い大衆層に全く興味を起させない。第二次大戦後、日本においても西洋的な価値観と習慣へのより集中的な志向が生じ、伝統的な格闘技に至るまでもそういう時代の波に飲み込まれた。空手道で例えるなら、練習者と特に観客が単に基礎練習と形の実演をただ見るだけでは飽きてしまうため、自由組み手（自由な試合）が1954年から開始され、大学でも行なわれるようになった。この自由組み手には、競技をするための規制、とりわけ打撃点については身体に当てることなく止める技が定められており、1957年の第一回全日本空手道選手権大会からこの自由組み手は用いられた。

伝統的な日本格闘技はスポーツ競技として広く増加し、その華々しさから世界中の関心を集めたことは明白である。しかし格闘試合（柔道、空手道、剣道など）において、あるいは形試合（空手道）や射撃試合（弓道）において、まさに“成績”の意味での試合態度こそ道の意味を

ある意味では弱くすることになるかもしれない。既に触れたが、“成熟”を獲得するためには自己中心性を捨てなければならない。スポーツ競技において勝つこと、あるいは賞杯の獲得などを目指すならば、あまりにも簡単に自己中心性を捨てることを忘れてしまう。これは勝ち意識が現われ、負けたくないことを示す。もっともスポーツ競技をだからといって否定するわけではない。しかしスポーツ競技は、道を目指すための一つの技として留めるべきである。またそれは全練習の中の小さな一部分にしなければならない、目的になることがあってはならない。これを遵守しなければ格闘技は遊び（Spielerei）になってしまうであろう。そして“成熟”を獲得するための意義を奪いってしまうことになる。競技観点を過度に強調することの潜在的危険に基づいて、例えば格闘技である合気道では、現在までもスポーツ試合としての実行を断念している。

(4) 伝統的な日本の格闘技に対する「道」の西洋人の取り組み

伝統的な日本の格闘技を本来の意味に即して実践するために、西洋と東洋の考えの相互間に違いがあるという認識を持っているということは、困難に遭遇した場合にそれをよりよく克服することができるために、西洋人に役に立つかもしれない。例えば自己という見解は、日本または極東と西洋とは異なるということである。西洋の考え方は、人間が生きていくために重要な領域の個性を強調することであるのに対して、日本人は、哲学的そして宗教的な影響に基づいているために自己主張をすることに不安を抱く。というのは、あまりに多い個性は自分自身や集団、そして最終的には宇宙の調和を乱すからである。このような態度は、例えば日本語の中にも見ることができる。必要としない場所では大抵の日本人はあえて“私”と言うことを主張しないが、このことについての規則的なものは全くないのである。一方西洋人は自分の教育に基づいて、まず第一に個人の見方を克服し

なければならない。そのためには日本人の言うような非自己主張状態を伴い、物事の本質に同調して新しい自由な自己感情を獲得することが重要である。これによって道を実現する能力を得ることができるのである。

それ以外にどんな格闘技の場合でも西洋人の“成績目標”という考えを強制するべきではない。というのはスポーツ格闘技あるいは自己防衛を一つの観点として前面に押し出すべきではないからである。速くそして有効な格闘技の動きばかりを習得しようとするならば、その動きの練習だけに偏ってしまい、背景にある本来の練習を見つめることが困難になってしまう。しかし少し上位の精神的な構成要素も過度に強調されるべきではない。なぜなら十分ではない身体的そして技術的な技能だけでは精神も“うわべ”だけである。西洋人は自分自身の“成熟”への“道”のために身体・精神そして技術を分離することのできない一貫性のものとし、恒常的な実践練習をすることに努力すべきである。

また、格闘技である“道”のための武道という日本語の表記を探究することは、よりよい理解のために貢献するかもしれない。武道というものの訳はおよそ“戦いの道”と表すが、武という文字は“戦い”を意味するのではなく、むしろ“戦いをやめるそして終える”ということを意味する。加えてある格闘技の熟練者は、武という文字はム（無）と読むことができ、これは本来道教と禅一仏教の意味からきているという意見を述べている。このような意見は、道の文字により深い意味を与える可能性を持つであろう。従って格闘技の“道”は“無の道”となり、“戦いの道”ではないことを表すはずである。

もし西洋人が他の考え方に耳を貸し、そして具体的に把握するためにその違いについて知ろうと努力を試みるならば、日本人と同じくらいどんな伝統的な日本の格闘技の道でも“見事に身につける”ことは決して難しくない。従って有名な日本格闘技の達人は真面目さと粘り強さを前提とするならば、日本人ではない人も全く

同様に“成熟への道”を獲得することができるとしている。

注釈及び引用文献

- 1) 部首は比喩的な意味をもつ中国の文字である。
- 2) 道教とは哲学的なある種の祖先崇拜と信仰心を伴って、世間の人々に対処していくことにより調和がとれるという中国人の宗教である。
- 3) Lao-tse (老子) に同じ、中国の哲学者 (紀元前約 6 世紀頃)。
- 4) Tao-te-king (道徳教) に同じ。道徳教は紀元前約 6 世紀頃に書かれた。
- 5) Feng, Gia-Fu 著; English, Jane 訳:
老子 道徳教. 印刷地 München
発行所 Hugendubel 社, 1978 (1984 第 4 版), P 1.
(※なお訳出に際しては、次の文献から引用した。
山室 三良, 「老子」, 中国古典新書, 明德出版社, P 77, 1969. 訳者)
- 6) 中国の哲学において“第一原因”の教えは、男性的 (陽) 主義と女性的 (陰) 主義の調和である。陽は明るい男性の根源的な力、創造的な原理である。陰は暗い女性の根源的な力、受け身的な原理である。
- 7) 日本で禅仏教は、約 1191 年に僧侶である栄西禅師 (1141~1215) によってもたらされた。その後栄西は、12 世紀後半に禅をより発展させるべく数度にわたって中国へ赴いた。
- 8) 禅の実施方法は“精神の隔絶”を描写することができる無心の技術である。これは武士に必要とされ、厳しい生活を克服することが求められたものである。
- 9) 將軍は軍の高位な官職名であった。また 1192 年~1868 年までの日本の統治首領を意味する。
- 10) これとは逆に、身体と精神についての相対的な例として西洋の両極性がある。それは中世スコラ哲学とキリスト教によって固められ、身体は敵であることを示したが近世になってやっとこの考え方が衰えてきた。
- 11) Tiwald, Horst 著: 賭けスポーツと道スポーツの精神 鍛練. 印刷地 Ahrensburg; 発行所 Verlag Ingrid Czwalina 社, 1981, (第 38 巻), P 81.
- 12) Deshimaru-Roshi, Taisen 著: 日本格闘技の中の禅. 印刷地 München; 発行所 Knaur 社, 1978, P 55.
- 13) 上記に同じ, P 51.
- 14) Herrigel, Eugen 著: 弓術技の中の禅. 印刷地 Bern; 発行所 O.W. Barth 社, 1983 (22 版), P 64 以下.
- 15) 参照 11) に同じ, p p. 47~

参考文献

- ・ Deshimaru-Roshi, Taisen:Zen in den Kampfkünsten Japans. München: Knaur, 1978.
- ・ Draeger, Donn F.: Asian fighting arts. Tokyo: Kodansha, 1969. S.81-141.
- ・ Draeger, Donn F.: Classical Bujutsu. The martial arts and ways of Japan: Volume 1. New York, Tokyo: Weatherhill, 1973.
- ・ Essink, Hein: Judō in Wort und Bild. Gütersloh: Bertelsmann, 1968.
- ・ Feng, Gia-Fu;English,Jane:Lao Tse. Tao te king. München:Hugendubel,1978 (1984’).
- ・ Funakoshi, G ichin:Karate-dō.Mein Weg. Weidenthal: Werner Kristkeitz, 1983.
- ・ Gröning, Manfred:Lexikon für Sport und Spiel. Köln: Helmut Lingen, 1977.
- ・ Grundmann, Michael: Die Niederlage ist ein Sieg. Tradition, Geist und Technik des asiatischen Kampfsports. Düsseldorf, Wien:Econ, 1983.
- ・ Hall, John Whitney: Das Japanische Kaiserreich. Frankfurt: Fischer, 1968 (1983’), (Fischer Weltgeschichte Bd.20).
- ・ Hammitzsch, Horst:“Zum Begriff ‘Weg’ im Rahmen der japanischen Künste”,in NOAG 82 (1957). S. 6-14.
- ・ Hammitzsch, Horst; Brüll, Lydia; Goch, Ulrich (Hrsg.):Japan-Handbuch. Wiesbaden:Steiner, 1981.
- ・ Herrigel, Eugen:Zen in der Kunst des Bogenschießens. Bern:Barth,1983 (22.Aufl.).
- ・ Hoover, Thomas: Die Kultur des Zen. Köln : Diederichs, 1978 (1986’), (Diederichs Gelbe Reihe; 44: Japan).
- ・ Kammer, Reinhard: Zen in der Kunst, das Schwert zu führen. Eine Einführung in die altjapanische Fechtkunst. Bern, München,Wien: Scherz, 1985.
- ・ Kano, Jigoro: Jūdō (Jūjutsu). Tokyo: Boardof Tourist Industry, Japanese Government Railways, 1937, (Tourist Library: 16).
- ・ Kono, Teruo; Oehsen,Elke von: Karate. Training, Technik, Taktik. Reinbeck:Rowohlt, 1986.
- ・ Lewin, Bruno (Hrsg.): Kleines Wörterbuch der Japanologie. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1975.
- ・ Miyamoto,Musashi:Das Buch der fünf Ringe. München: Knaur, 1983.
- ・ Nagamine, Shoshin:The essence of Okinawan Karate-dō. Rutland; Tokyo: Tuttle,1976.
- ・ Nakayama, Masatoshi:Karate-dō. Dynamic Karate. Sprendlingen: Budō-Verlag,Sport-Rhode, 1972.
- ・ Nitobe, Inazo:Bushidō. Die innere Kraft des Samurai. Interlaken: Anasta, 1985.
- ・ Protin, Andre:Aikidō. Die kämpfkunst ohne Gewalt:ein Weg der Selbstfindung und Lebensführung. München: Kösel, 1984 (1986’).
- ・ Reid, Howard; Croucher, Michael:Der Weg des Kriegers. München: Hugendubel, 1986.
- ・ Sasamori, Junzo:Das ist Kendō, die japanische Fechtkunst. Berlin: Weinmann, 1987.
- ・ Stein, Hans Joachim:Die Kunst des Bogenschießens Kyūdō. Einführung in die Grundlagen und Anleitung zur praktischen Ausübung der Zen-Kunst des Bogenschießens.Bern, München, Wien: Scherz, 1985.
- ・ Tiwald, Horst:Psycho-Training im Kampf- und Budō-Sport. Ahrensburg: Czwalina, 1981,(Sportwissenschaft und Sportpraxis; Bd.38)

II. Heiko Bittmann論文に見られる特色

ここでは Heiko Bittmann の論文についていくつかの特色をあげ、それについて若干の考察及び補足等を加える。

1. 道概念の基本的理解

道概念を理解しようとする時、我々日本人は通例“道”という文字自体の意味からそれを理解しようとする。しかしながら漢字という文化に馴染みが薄いヨーロッパ人にとって“道”という文字自体が一つの研究対象となるためか、彼は“道”という文字の構成から理解しようとしている。まず“道”を偏と旁に分解し、それぞれの部首が持つ意味を把握した後に“道”と

いう文字の意味を判断している。

彼はここで“道”の偏の意味を「進むこと」とし、傍の意味を「頭あるいは指導者」とした上で“道”の意味をおよそ「先に立って歩く指導者」と判断している。日本では偏の意味は「道路を歩く」ことを表し、これが部首となって「道路」「行く」「進む」などに関する文字を作る¹⁾(p.408)。また傍の意味は人の頭や首を表し、そこから「かしら」「はじめ」などの意味にも用いており¹⁾(p.878)、彼の偏と傍の解釈は正しいと思われる。しかし偏と傍が合成されて出来た“道”の意味は少し解釈が異なり、一般的には「頭を向けて進んでいく道」「ある方向にのびる道」あるいは「基準とすべきやり方」「専門の技術」と解釈される²⁾。またこの“道”の意味は、思想的・宗教的な観点からは、転じて「人の行なうべき道」(道徳・正道)「宗教の教え」「信仰をもとにした組織」(伝道・仏道)になる²⁾。

Heiko Bittmann論文の冒頭では、一般的な“道”解釈のみが示されているが、論文の中心部分では、この思想的・宗教的意味合いが強く示されており、“道”の意味を単に一般的な意味からだけでなく、より深い思想的・宗教的意味からも理解しようとしていることが分かる。

このような“道”という文字理解の仕方は、日本の伝統的な格闘技の一つである柔道の創始者嘉納治五郎が、西洋的な合理主義・科学主義と儒学的な知識とを結びつけた結果、術から“道”への転換を成し得たことと共通するものがある。

2. “道”の歴史的理解

Heiko Bittmannは日本文化における“道概念”の起源を日本文化の精神史という観点から明らかにしようとしている。その特色は、日本文化の成立を道教・仏教・儒教・陰陽の教え等の大陸からの思想的な影響という側面から理解しようとしていることである。

日本における自然宗教的思想は道教・仏教・儒教・陰陽の教え等が伝えられるまでは、神道

という土着宗教の中で、自然に対する素朴な感受性をもとに、目に見えない神の働きへの崇拜を育てていた。これは中国から伝えられた宗教とは異なって、開祖や教理を持たず、神を祭り、禊・祓を行なって心身を清浄にするといった素朴な民間信仰であった³⁾(p.1253) ⁴⁾(p.1046)。その日本古来の土着的宗教が外来思想である仏教や儒教、道教や陰陽道^{註2)}の影響を受けつつ成立し、理論化されたことからこれらの思想が日本文化にもたらした影響は大きかったと言える。しかしながら仏教は6世紀に伝えられているにもかかわらず、一部のエリートのための教えとされ、それが民衆のなかに浸透していったのは鎌倉時代であり、同様に儒教が社会一般に及んだのは江戸時代以降であった。わが国では土着的宗教の神道と外来宗教の仏教が二つの大きな流れをなして発展したが、儒教などは宗教としてよりも社会道徳や政治倫理として受容された面が強い。

Heiko Bittmannは上述のように日本の思想史を捉えており、そこから“道概念”の成立過程を通して武士道の成立に検討を加えている。

この点について若干の補足をしておきたい。武士道とはわが国の武士階層に発達した道徳律である。その原型は鎌倉時代以後形成され、江戸時代に儒教思想に裏付けされて大成、封建支配体制の観念的支柱を成した。この大成の背景には、徳川幕府がその体制を維持するための精神的支柱として儒教^{註3)}を積極的に奨励したことが挙げられる。武士道は、忠誠・犠牲・信義・廉恥・礼儀・潔白・質素・儉約・尚武・名誉・情愛などを重んずるものであり、それは儒教が教えるところの忠・孝・智・仁・勇・義・礼・信などの徳目と一致するところが多い⁵⁾。

Heiko Bittmannは“道”がこのような武士道の成立に深く関わり、人間の完成に導く手助けをするようになったと捉え、思想的・宗教的観点から理解しようとする。

3. “道”の影響による練習形式

Heiko Bittmannは、日本の格闘技は作法形式と練習形式が一連のものであり、単に技術や身体の修練のみではなく、人間の道徳的な教育のための手助けになっているとしている。また、練習時に見られる呼吸法や瞑想法（黙想）の中にも思想的な意味を見いだそうとする。

彼がここで作法と練習形式を一連のものとして捉えるのは、武道の練習形式の一つである“形”の持つ意味からである。

“形”には、無意識のうちに習慣化される行為（礼法）と意識的・自覚的に習得の対象となるもの（技術様式の習得）の二面性がある。ここでの礼法というのは、立礼や座礼などの「相手の人格を尊重する大切な作法」のことであり、技術様式の習得というのは、“形”を模範としてその武道の持つ技術を学ぶことである。しかしながら後者は技術的側面だけが強調されがちであるが、そこには単に模範となる“形”を真似るだけではなく、身体の鍛練や技の錬磨が必要になる。これを支えるのが心（精神）であり、後者には、心・技・体を習得させるという意味も含まれるのである⁶⁾(p110)。

Heiko Bittmannも記述している通り、確かにこの“形”の習得には、技術を学ぶと同時に道徳的教育の在り方や人間形成も意図されているのであると言えよう。

Heiko Bittmannはその他にも呼吸法や瞑想法の中にも道教や禅仏教（禅宗）による思想的・宗教的な見解を示している。

確かに道教においてもその教えの一つとして呼吸の調整・断穀による長寿の法が説かれている。また禅仏教においても坐法と呼吸法を仏道を修めるための根幹としている⁷⁾(p.1048)。

ところで屋内での剣術の稽古が一般的に行なわれるようになったのは江戸時代からと言われており⁸⁾(p.96)、この時代には儒教の影響を大きく受けている。儒学では物事に向かう場合、まずそれにふさわしい心構えをつくることを重視し、その方法として「静坐法」がある⁹⁾(p.96)。つまり、現在の屋内稽古場での剣術の礼法の一つ

である「正坐して黙想をすること」は、この時代から一般化してきたと考えられよう。すなわち現在の剣道に見られる黙想や呼吸は、Heiko Bittmannの言うように道教や禅仏教の与えた影響が考えられるが、儒学の影響なども考慮する必要があるのではないだろうか。

4. “道”の意義とスポーツ競技

Heiko Bittmannは「西洋スポーツ競技は成績重視であり、練習の意義は好成績の達成を得ること、その目的は勝利を得ること」としており、日本の伝統的な格闘技が西洋のスポーツ競技化することに危惧を感じている。

周知の通り柔道は1964年の東京五輪大会から体重別制が導入され、「ポイントの柔道」と言う言葉に表されるように、「柔よく剛を制す」と言われた「技の柔道」とは趣を変えてきている。これは日本の伝統的な格闘技である武道がスポーツ競技化されて行った良い例であろう。

ところで武道とスポーツは何が違うのであろうか。この異同について志々田はおおよそ次のように述べている⁷⁾(p.483-489)。

武道の本質的特性は競技性であり、これは技が行なわれる現象の中から捉えられる。つまり、武道とスポーツは競技性を持つ点において極めて類似性がある。競技が勝負を競うものである以上、勝利至上主義はプラスの面もあるが、その属性として主としてマイナスの特性に数えられるのである。また武道とスポーツとが異なるところは、武道が礼儀・作法を身につけさせる効用が見られる点である。

このような武道とスポーツの関係に対して、Heiko Bittmannは「・・・スポーツ競技をだからといって否定するわけではない。しかしスポーツ競技は、道を目指すための一つの技として留るべきである。また、それは全練習の中の小さな一部分にしなければならず、目的になることがあってはならない。これを遵守しなければ格闘技は遊び(Spielerei)になってしまうであろう。そして“成熟”を獲得するための意義を

奪いってしまうことになる。・・・」と述べている。

5. “武道”における言語学的意味の探求

Heiko Bittmannは“道”のための武道をよりよく理解するために、日本語の表記法についての探求を一つの手段としている。

ここで注意しなければならないことは、武という文字を無と読むとする（ある格闘技家）の意見である。武道の武を無と読むなら必然的に無道となるであろう。この無道という言葉は一般的には「道理に背くこと」「人たる道に背くこと」となってしまう。つまり単なる文字の表記上の意味だけについて言えば全く正反対の意味になってしまうのである。日本語の表記法についての探求は、興味ある可能性を提供しているが、現段階では必ずしも説得的なものにはなっていないように思われる。

III. 結

Heiko Bittmann論文の道概念を通して理解される武道論の特色を一言で述べるとすれば、それは心（精神）・技（技術）・体（身体、肉体）の三点が調和することが理想とされており、「この中の一つでも欠如すれば“道”の“成熟”には至らない」とする極めて思想的、あるいは人格形成的な捉え方の強い武道論ということになる。

このような武道に対する深い理解と洞察は、彼が日本学の中で特に思想史の素養を身につけ、同時に武道の実践者でもあるという点に由来すると思われる。

注

注1) 柔道に関して言えば1934年に欧州柔道連盟発足、1952年に国際柔道連盟(IJF)が結成された。また男子柔道が東京五輪から、女子柔道はバルセロナ五輪からオリンピックの正式種目となっている。剣道は1967年に国際剣道連盟(IKF)が、合気道は1975年に国際合

気道連盟(IAF)が結成され、空手道は1970年にWUKO(前空連系)、1975年にIAKF(空手協会系)、国際空手道連盟(極真会系)に第1回世界大会がそれぞれ行なわれている。また弓道に関して言えば欧州弓道連盟(EKF)が誕生しており、セミナーが毎年8月にヨーロッパのどこかで開かれている⁷⁾(p.523)。

注2) もとは陰陽(いんよう)の教え、わが国に伝来して陰陽道(おんみょうどう)となった。

注3) 儒学の中でも特に朱子学が挙げられる。

宇宙を、存在としての気と、存在・根拠・法則としての理と、二次元的に捉え、人間においては前者が気質の性、後者が本然の性となり、本然の性に理が備わるとして性即理の命題を打ち立て、この理の自己実現を課題とした⁸⁾(p.1150)。

引用及び参考文献

- 1) 鈴木修次 編：角川最新漢和辞典(75版)、角川書店、1980
- 2) 藤堂明保 編：学研漢和大事典、学習研究社、P. 1328, 1982
- 3) 新村出 編：広辞苑(第3版第3刷)、岩波書店、1985
- 4) 山縣宏之 編：情報知識 imidas、集英社、1989
- 5) 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融 編：現代体育・スポーツ体系 第22巻(剣道・フェンシング・なぎなた・古武道・銃剣道)、講談社、P. 268, 1984
- 6) 稲垣正浩 編：「先生なぜですか」武道編柔道にはなぜ黒帯があるの?、大修館書店1991
- 7) 入江康平 他：日本武道学研究 渡邊一郎教授退官記念論集、島津書房1988
- 8) 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編：現代体育・スポーツ体系 第19巻(弓道・アーチェリー・射撃・近代五種・バイアスロン)、講談社、1984
- 9) 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編：現代体育・スポーツ体系 第20巻(相撲・柔道・空手道・合気道・日本拳法少林寺拳法・合気道)、講談社、1984
- 10) 釋 悟庵：禅と武士道(再版)、弘文堂、1907
- 11) 橋本 實：日本武士道史研究、雄山閣、1938
- 12) 橋本 實：武士道の精神、明世堂書店、1943
- 13) 日本文化研究会 編：武士道精神、東洋書院、1935

付記

本論稿は、Heiko Bittmannの論文を邦訳し、それについて久光文彦が若干のコメントを加えたものである。

Heiko Bittmannは若手のヤパノロギストであり、特に日本の武道に見られる思想の分析を研究テーマとしている。その関心の中心は、西洋の心身観・価値観と日本の武道に代表的に見られるそれとの比較考察であり、武道やスポーツといった人間の根源的な行為にそれらが最も端的な形で凝縮されていると見ている。

例えば、Heiko Bittmannの考え方では、西洋的スポーツの世界ではチャンピオンシップを獲得することが目的となるが、武道の世界では必ずしもそうではない。武道では限りない「成熟」、卑近な例をあげるとすれば、彼がその時有している段位が仮に五段だとすれば、限りなくそれを前進させていくようなプロセスが目的となる。

五段というのは四段よりは上であり、六段には至ってない段階の、努力すれば六段になりうる可能性を秘めた段位として定式化されるわけである。Heiko Bittmannはこのような武道の考え方にヨーロッパの思想には見られない新たな思想的可能性を見いだそうとしているようである。

久光文彦のコメントはHeiko Bittmannの論文の特色や補足すべき点をごく手短かに述べ、その理解を助けようとしたものである。合わせてお読みいただきたい。

なお、Heiko Bittmannは博士論文作成のために近い将来金沢大学に再留学の予定であり、その成果に期待したい。
(大久保英哲)